

【ファミリーという因縁(えにし)】 (1967)

Martha Harris

〔訳註；この論文は、かつて《New Society》という新聞に掲載された4回シリーズのエッセイを纏めたもので、原題は【The family Circle】である。ここには幾つかマーサ・ハリスの自伝的なエピソードが匿名で挿入されていて興味深い。〕

・兄弟・姉妹について

ファミリーは両親から始まります。そこに誕生する個々それぞれが他のファミリーのメンバーとどのような関係性を持つことになるかは、その子どもと両親の間での関係性がいかようであったか、それに影響されるといえましょう。子どもは実際にそうした外界の諸々の事態に対処するすべを徐々に身に付けてゆくわけではありますが、そればかりではなく、同時にごく私的ともいべき(プライベートな)無意識の心がそうした事態をその子ども固有のありようでさまざまに経験してまいります。

弟もしくは妹が現れたとき、年上の子どもはそれまで覚えのなかった嫉妬心というものに直面することになります。そのときその子は母親を父親の占有として譲らなくてはならないということを理解するのがあります。そしてそれから後に、母親を父親と並ぶ誇り高き位置に据えるというわけであります。時としては父親がその子にとって一番掛け替えのない人になることだってありましょう。母親は、こうした子どもの嫉妬心を予期しかつ恐れるのでありまして、それで子どもに新しい赤ちゃんの誕生の喜びを分かち合うように熱心に口説くわけであります。そして熱情を込めて、<おまえの新しい赤ちゃんだよ>とばかりにしばしば語るわけであります。それから、実際に赤ん坊が訪れたとき、それが全然自分の方を見てくれない、何も出来やしない、そして母親が当然ながら赤子に掛かりつきりになるわけです。それで子どもにしてみれば、それが自分の赤ちゃんなどではないということを悟りますし、授乳したり入浴させたりもしくは泣いたときにはあやしてやるといった子育てなぞ自分にはとてもできないということも悟るわけであります。この苦い失望感に伴い、今や自分が家族のなかで唯一の子どもではもはやないということに拒絶されたという思いやら怒りやら抑うつ感をも覚えるわけであります。赤ちゃんの性別が自分とは違う場合には両親が望んでいたのは実はそっちの方の子どもに相違ないと思いがちであります。

もしも両親がそうした感情は子どものごく正常な発達の一部であると心得ておりますなら、いずれ子どもがそうした感情に慣れてゆき、折り合いを付けられるようにもなり、新しい弟もしくは妹との間に偽りのない真っ当な関係性を築いてゆけるはずと時間を掛けて待つてやろうとするでしょう。それもまた、子ども側に己れ自身の内なるアンビヴァレンスについて幾らかなりとも認識が備わっていることが条件ともいえましょう。

こうした状況では子どもはそれぞれ個々に実にユニークに対応します。直面化しようとしたり、もしくは否認することもありましょうし、もしくはなんとか事態を自分に都合よく操縦せんとするかも知れませんが。

その子の内心の悶え、時折のパニック、涙、そして親のアテンションを頻りに求めるやら幼稚っぽい憤りに身を任せたりしても、その都度親が子どもの気持ちを認めてやれば、それでなんとか支えられ、やがては新しい赤ちゃんがいても悪くないといった感情やらむしろ嬉しいといった喜びを見出せるようになるかも知れません。赤ちゃんを両腕に抱えていかにも誇らしそうな母親に子どもは同一化するかも知れませんし、或いは母親が赤ちゃんに掛かりつきりで彼とも父親とも一緒に時間がさほど持てないときなど、その埋め合わせに父親と一緒にいることで双方共に慰め合うやら、また会話を愉しんだりすることもあつたりするかも知れません。もしも赤ちゃんがやがて彼を認めてくれて、微笑でもしてくれるようになれば、それやら赤ちゃんが相手してやると喜ぶようになり始めたり、一緒に遊んでもらいたがったり、そして赤ちゃんに自分の名前を呼ばれるようになれば、大いに気持ちが和むでしょうし、内心得意でないはずはありません。

・年齢順ということ

兄弟・姉妹間の関係性は、勿論のこと、ファミリーの中でそれぞれが占める立場によっても左右されがちであります。しばしば、一番年上の子どもは(男の子もしくは女の子のいずれも)親たちによって励まされ、年下の子どもたちに対して母親らしい態度を取ることがあります。こうしたケア・テーカー的役割は一番年長の子どもにも、そして下の子どもたちにとっても満足なものともいえましょう。もしもそれが基本的に愛情のこもった、恨みがましい不承不承な態度ではなく、また両親の強要やら、もしくは母親への羨望やら憤りを否認する内なる必要性から突き動かされて敢えて無理してといったふうでなければの話ですが・・・こうしたことは子ども時代をはるかに超えて、両親が亡くなって後もずっと引き摺ってゆくものといえましょう。年下の子どもたちは、年上の兄もしくは姉に対して憧れもし、また頼りにもするわけであります。彼らは、自分に年齢がより近い人物という意味で、両親よりももっと期待感をもって熱心に見倣う誰かということになりましょう。彼らはまた、ごく身近で上の子どもの身体的成長を日常的に逐一目にしますし、かつあんなこともこんなことも出来るんだとその能力を見せ付けられもし、それに年上であることの特権のようなものをも傍らで見聞きして大きくなるわけです。そうしますと、例えばメアリーにはボーイフレンドが出来た。今日彼とダンスに出掛けるって。私の番は明日だわ>と言った具合に夢想することもあつたりもいたしましう。

時折、子どもの発達というのがひどく背伸びしている、つまり早熟ともいえる場合があります。すなわち、そこでは両親やら大人全般に対しての日頃の未解決な憤りが覆い隠されているといったことがあるわけです。そうしますと、その子はこれ見よがしに己れの腕前やら手柄を誇示することをしかねません。それも同胞に(しばしば年下のもの)羨望やらフラストレーションを引き起こすためであります。それで自分はまだまだダメだ inadequacy とか幼稚だといった、チクチクと心痛むフィーリングを彼らに味わさせるといわけであります。詰まりのところは、そうしたフィーリングこそが己れ自身の中でコンティンできず解決できずにいるということなのです。年下もしくは力の弱い子どもは、己れ自身を償うところの何らかの空想に浸ることもありましよう。われわれはそうした‘お伽噺 fairy tales’の幾つかをよく承知しております。

例えば<シンデレラ>であります。彼女はボロを着ていても、柔和で従順であり、かつ美を隠し持っているというわけですし、やがては王子さまの心を虜にし、年上の醜い姉たちを打ち負かすといったハッピー・エンドの結末なわけです。3人の兄弟の末っ子が、ウィットやら善良さもしくは魔術に助けられて、人生の難題に見事に立ち向かい、年上の兄たちを追い越し、それからめでたくも王女さまのハートを射止めるといった話もたくさん聞かれます。親が常日頃、それぞれの子どもの個性として尊重し、皆をそれぞれにフェアに扱うことでそうした子どもが秘かに抱く恨みの念を宥め、傷つきやすい子どもを他の子どもの犠牲にならないように護ることは重要なことでもあります。そもそも「生まれ付き nature」というものは決して公平なものではありません。たとえ同じファミリーであっても、子どもたちはそれぞれ才能などを等しく賦与されているともいえません。利発な同胞のなかに頭の鈍い子どもがいたり、器量よしの姉妹に全然目立たない子がいたり、明らかに不利な条件 *disadvantage* で人生をスタートしなくてはならない例は幾らでもあるわけですね。さほど明らかではないにしても、同様に不平等ということになりますのは、ごく無防備に愛情に縛られて、つい唯々諾々と言われるがままにおとなしく従ってしまうといった子どもの場合であります。それで得てしてより万能感的でかつ如才のない兄弟・姉妹にとっての道具もしくは‘ドア・マット’にされかねないといったことが起こるのであります。

・親の手助けなるもの

両親が子どもたち同士の間をどう取り扱うかについてですが、もしも彼らなりの洞察力があるとしたら、それは児童期に兄弟、姉妹そして両親に対して彼らが密かに抱いたところの競争心 *rivalries* にどうか折り合いが付けられているといったことなわけです。そうであれば、彼らはかつて子どもだった頃とまったくのどこ何ら変わらない、同じ競争心が子どもたちの間で表出されているのを認めることができますし、それで盲目的にコンティンされていない彼ら自身のパーソナリティゆえに子どもの誰かを依怙鼻息したり、他の子どもに辛く当たったりして、子ども間の不和に‘火に油を注ぐ’といったことはしないで済むことになりましょう。

両親にそうした余裕がある限り、子どもたちは公平でかつ洞察力のある両親との同一化ができるでしょうし、それでお互いに公平に渡り合うことを学び、それぞれ年齢別、性別そして個々の能力に応じて、さまざまに違った特技やら異なる分野での才能があることを考慮に入れ、互いを尊重し合うことでありましょう。もしも両親に子どもたちがありのままに、または彼らに備わっている潜在的な資質をもよく認められており、十分に気に掛けてもらっているとすれば、当然のこととして彼らにしても兄弟・姉妹の中に何らかの良さ *qualities* を認められるに違いありません。嫉妬めいた競争心に駆り立てられることもそれだけ少なくすむでしょうし、勝ち誇るためだけの‘餌食’を求めたり、或いはいじめられて気を挫かされるといったことも少なくすむでしょう。自分らしさを全うする道が一つしかないというわけではないと解れば、競争心も熾烈さを増すことはないものと考えられましょう。

子どもっぽさ、すなわち母親への依存性ということであれば、それは‘女性性’と同義語として思わ

れるせいか、男の子は自立性を勝ち取らんがために敢えて姉妹やら一般の女子たちを軽蔑するふりをする傾向があります。女の子たちは、男の子に負けんとして精一杯に‘お転婆さん’をきどる時期があつたりしますでしょうし、もしくは兄弟が有するところの腕力やら特権にかなわないとして、兄弟そして男の子全般に対して、いやに恰好付け取り澄まし、さも良き母親ふうないい人といったポーズで対抗せんとすることでしょう。もしも父親がその妻に対して一人の個人として、また一人の女性として尊敬しているとすれば(つまり単なる家政婦とか性的相手として都合のいい、もしくは慰みものといった以上の誰かであること)、そしてそれが母親側の態度にもごく自然に影響しているとしたら(つまり夫が単なる稼ぎ手だったり、慰め手であるといった以上の誰かであること)、子どもたちは徐々に青年期頃には自分の性的なアイデンティティと折り合いが付くことになりましょうし、またその一方で兄弟・姉妹それぞれの性別についても尊敬を払うことをわきまえてまいりましょう。

兄弟・姉妹の間に培われるところの友情 friendship というのは、自分たちが一緒に育った経験、そして互いの競争心やら裏切りにも耐えてその関係性が今尚生き延びてるということに基づくわけでして、当然ながら時として‘忠誠心 loyalties’が問題となることもありましょう。そうした親密な理解と愛情は同じ時期に交わる異性に対して抱くこともありましょうから、これはいずれ自分が誰を夫にもしくは妻にするべきか、何らかの賢明な選択をする一助となるに相違ありません。男の子なら、女の子の性的魅力をルックス(見てくれ)だけに頼ることもしないでしょし、女の子なら、男性の経済的な成功の見通し・将来の有望性といったことにひどく重きを置くことも少なくなるかと思われまふ。もし男の子に姉妹がいる場合、彼女らの女友達に日頃馴染む機会でもあれば、姉妹の彼女らへの反応を観察することもできますわけで、同年齢の女の子と親密で広範囲な関係を結ぶことのできなかつた男の子に比べると女の子と結婚するというこの意味を悟るチャンスにより恵まれているといえまふ。また姉妹にとつても兄弟がいるということはそれにも似た有利さがあるように思われまふ。

兄弟・姉妹がやがて大人になり、その内の誰かが結婚したとき、その絆 bond そのものが試されることとなります。これはおそらく、残された方が新しく結婚する兄弟姉妹の誰かととても親密な関係にあつた場合には尚更にそうでありまふ。例えば、結婚した兄に対して妹は一人置き去りにされたことで胸中に覚える羨望やら嫉妬心に耐えねばなりません。もしくは義理の姻戚関係となつた新しい姉を受容するということにしても、たとえ内心では口に出せない懸念があるとしても、愛する兄のためには我慢しなくてはなりません。そうした試練にうまく対処しなくてはならないわけでありまふ。

さらなる試練となるのが、親の死を迎えたとき、もしくは親が老いに伴い、不遇の身となつた場合であります。いよいよ介護が必要となつた両親を誰が面倒みるか、その責任を分かち合う問題が起つてくるでしょうし、両親が亡くなつた後にその遺産を銘々がたしなみを持って配分し合うといったことについても問題が起る場合があります。その親の死が予期されていたものか、もしくは突然だったのかいづれにしても、たとえそれが寿命ゆえの安らかな死であつたと納得できたとしても、成人した子どもたちの内に尚も幼少期から引き摺っている依存性、喪失感、そして裏切りといった幼時的情動性が頭を

擡げるとことはありましよう。またそれと同様に、死んだ親の愛情に絡んでの多寡を云々しがちで、それが(しばしばありがちなことですが)どれほど親に遺して貰ったかという物質面で測られるとしたら、当然ながら幼稚かつ不合理な嫉妬心も呼び覚まされるといったことになりましよう。

われわれの社会では、兄弟・姉妹が成人してから互いに接触し合う頻度というのは、それぞれ仕事を抱え、そして自分の家族に対する責任もありますから、そのために生じる時間・空間的制約によって大いに異なるわけでありましよう。しかしながら多くの人々にとって、‘ファミリー’といった感情 a family feeling’は、同じ両親を共にし、児童期をも一緒に体験したということがおそらく互いの絆として深く留められており、友だちとの間の友情以上により強いものであり、従ってそうした感情があればこそ、お互いが必要な折には誰よりも求め合い、頼りにし合うということがあるともいえましよう。

・祖父母について

祖父母と孫との絆は、もしも互いに訪問する距離が近いならば、しばしば密接ともなり、お互いにとって満足のゆくものであり得るでしよう。しかし兄弟・姉妹にも似て、それがどのようなものになるかは、そのかなりの程度、まずは親子関係がどういったものかによって決まるといいでしよう。

孫たちが赤ちゃんであるとき、おばあちゃんは育児に積極的に手を貸そうとすることは大いにありがちです。まだまだ役に立つし、必要とされたいとも思うからです。それで娘もしくは義理の娘との仲が基本的にうまくいっている場合、時々赤ちゃんの見守りやら世話をしながら、おばあちゃんは自分がこれから先もう子どもを産むことはないということであったとしても、こうした機会にかつての妊娠やら子育てに夢中だった頃のことを大いに追体験することでありましよう。これらの記憶があまりにも理想化されていない場合、すなわち彼女自身が母親になろうとして躍起になっていた折に心に覚えた喜び、不安、そして怒りといった複雑な感情を覚えていて、それらを振り返ることができるなら、おそらくいかにも何もかも知ってるといったふうな態度で新米のママさんに余分なストレスを負わせようとはしないでしよう。もし彼女が子育ての経験をありのままに、絶えず試みそして失敗の連続として味わうとしますなら、彼女は孫の世話に当たりながら、新しい赤ちゃんばかりではなく、自らの息子もしくは娘の成長にも手を貸すといった意味で二番目のチャンス a second chance を貰ったと感じることでありましよう。

同じようなことがおじいちゃんについても言えるかも知れません。孫がまだ小さい頃ですと、そのような育児に関わることに積極的に手出しする機会も(或いは願望も)ないかも知れませんけれど…。祖父母になるということは、しばしば新しいいのちと暮らしを共にするわけですから、‘生き返り renewal’を意味するともいえましよう。しかしそれも以前のように責任もさほどないわけで、したがって親であったときに比べればもっと子育てを愉しむ余裕があると言ってもいいでしよう。勿論のこと、人によって違いもありましよう。場合によっては、中年となりそろそろ老いに近付いてきているということに胸中折り合いの付かないでいる人にしてみれば、おばあちゃんになる・おじいちゃんになるといった役割は心理学的に極めて

心の準備がまだというわけで、ですからどちらかというと赤ちゃんは距離をもって眺めていたい、疎遠のま
まがいいと思うかも知れません。

しかしながら大概のところ、ごく普通の感覚からしますと、孫たちの成長に寄り添う祖父母というのは、
新しい世代との間に心情的に抜き差しならぬ関係を持つことになるわけです。それで、もしかしたら自
分たちは生きてその行く末を見届けることはないかもしれない世の中の変化やら進歩についても期待
感を膨らませるといったことはごく自然であろうかと思われます。それに孫がおりますと、昔からの友だち
で同じくおじいちゃん・おばあちゃんになり、似たり寄つたりの状況にある人ともさらなる新しい絆が蘇り、
孫を話題に会話も増えるといったことがあります。そしてまた、成人した息子そして娘たちとの間でも、
しばしばファミリーが仕事よりもっと身近な話題になるということだってあります。

ごく早期の頃から子どもは、祖父母が身近に寄り添っていていることに敏感であり、特別な喜びを
覚えるものであります。どんな些細なことでも達成できたら、すばやくそれに反応し、褒めてくれたり喜ん
でもらうといったことがありますので…。祖父母のお宅は、もしも子どもが大きくなって訪問できるよう
なり、お泊りもできるようになった場合には、常日頃彼自身がお家で遭遇するスツタモンダ、また両親と
の間のエディプス葛藤からも、そして兄弟姉妹との間での競い合いからもしばし遠ざかることが出来ま
すので、それは一時的な避難所となるでしょう。祖父母の結婚というのは、もしもいずれもが健在であ
り、それぞれ互いに愛情を抱いている場合であったとしても、子どもがまったくのところ依存している彼
自身の両親に対してなら(意識するにしても隠すにしても)どうしても所有欲を巡って葛藤めいた反応
をしまいがちですが、そうした感情を呼び覚まされることは滅多にならうかと思われます。祖父母
との関係性においては、新しい赤ちゃんによって自分の居場所が乗っ取られるといった脅かしに内心ビ
クビクする必要などありませんわけで、他にも孫たちがいるとしても切迫した嫉妬心に悩まされるとい
った状況は避けられるかと思われます。彼らは何しろお家に居る兄弟姉妹とも違って、いつも周辺にうろ
うろしているわけではありませので全然目障りにはなりませんわけで…。祖父母というのは、子どもら
が成人した頃にはその親みたいには日々家事の切り盛りに精を出すこともせず済むわけで、その分、
彼らは孫を相手に話をしたり、聴き入ったり、質問される度に驚いてみせたり、ゲームを一緒にしたり、
物を作って遊ぶのに手を貸したりできるわけであります。祖父母と一緒にすると、時に子どもは自分がほ
んとうに必要とされていると感じることが出来るのであります。お家では疑いもなく彼がしばしば両親にと
っては‘お邪魔虫’になることだってあるわけです。何といっても彼らは日々の暮らしの明け暮れに忙し
いわけで、仕事を抱え、日々の糧を得るのに精出して働かねばならないのですから…。

祖父母を通して、子どもはママやパパについての話を聞くことができます。彼らが彼と同じ年齢
の頃、どんなことを兄弟姉妹にしたのか、言ったのか、そして彼らがいたずらをして怒られたときのことも、
そして立派なことをして褒められたときのことも…。こうしたことから、もはや両親をオリンポスの神々のよ
うに偶像視しなくても済むということになりましよう。子どもの頃の彼らと同一化し、いつか自分も大きく
なれるといった楽天的な期待感を抱くことにもなるに相違ありません。それから多分彼を育てあげるこ

とに何かと苦勞を強いられている両親に対しむしろ同情的に感じるようになるかも知れません。

子どもたちが成長し、より自立してゆくときに親子関係が変わるように、祖父母と孫たちの関係も変わってまいります。それらどちらにしても、時間の経過のなかで徐々にその本来の特徴をあらわにするといえましょう。例えば、大概のところニーズでしかない場合、すなわち個人的人格 individuality に対する尊敬やら賞賛やらが育ってゆかず、言うなれば或る種の相互的な援助交際といえますか、そういうことでありますと、孫たちがジュニア・スクールへと通いだし青年期に達しますと、祖父母を訪問するのは義務と捉えるようになり、退屈と思うようになりがちです。そして老いた人の身になってみますと、無視されたと感じますし、そしてその存在価値は‘プレゼントをくれる人’やら唯の‘都合のいい人’になっているばかりだと思いがちであります。

或る一人の年輩の未亡人がおられまして、大家族でしたからもう3人の孫のお祖母ちゃんでありました。彼ら孫たち全員はもうとくに児童期を過ぎ、その殆どがそろそろ青年期を迎えようとしておりました。このおばあちゃんが落ち込んだ気分になった或るとき、娘の一人に、今や自分はもう役立たずに感じられると打ち明けたのであります。夫はもう亡くなっておりますし、そして彼女はもはや孫たちの世話を焼くことも要らなくなったということなわけです。彼らはそれぞれに友達やら、学校やら、そしてこれからの将来のことで日々忙しく追われております。そこで娘は彼女にこんなふうに語って慰めたわけなものでした。くでもね、お母さんは、人はどんなふう到老いてゆくのか、皆にそのお手本を示してくれているじゃないの。それってまだ私ができることではないわけね。まずお母さんが最初よね。それって、あの子たちもいずれは学ばなくてはならない大事なことなんだもの。そう願ってるのよ>と…。

こうした言葉はとても賢明に聞こえます。たとえどんなに幼くとも、われわれは老いて死んでゆくということの恐れを抱くものであります。直接的にはそれと意識せずとも、多くの異なった仮装の下にそれは経験されているともいえましょう。身近に誰か穏やかに老いてゆく人の姿に接する機会があれば、われわれ自らの‘死ぬべき運命 mortality’に折り合いを付けるのにどれほど助けになるか知れません。

或る80歳になる老いたご婦人がいらっしゃいました。かつてはとても美しく、だが今やげっそりややせ衰え、そしてやつれ果てております。余命短い身でいたわけです。それで死ぬ前にさよならを家族の皆に言いたいということになり、孫たちも連れてこられたのであります。それらのうちの一人、10歳の女の子はとても明朗活発な子なのですが、つい怖じけてからだを引いてしまいました。目の前のまるで骸骨になってしまっているおばあちゃんを認めることができなかつたのです。その老いた婦人は子どもがなぜ身を引いたのかを理解し、慈しみの溢れたその顔に微笑を浮かべ、彼女にくおまえは何て可愛らしい bonny の。昔のわたしもそうだったわ。今もそうだといいのにつて思うけど…>と言いました。その女の子はそれでそれがかつて馴染みのあったおばあちゃんだということに気づき、彼女にキスをし、泣いたのです。その後、彼女が言うのには、くわたし、これからは死ぬのをもう恐れたりしないつもりよ。おばあちゃんは全然死ぬことを恐れてなんかいなかったし。そしてわたしたちにハッピーでいて欲しいって。それから彼女

のことを思い浮かべるとき、あまり泣いたりしないでねって願っていたはずよね・・>と。この少女は、おばあちゃんのこの世との永訣の悲しみ、そして今や喪われた、かつての己れの美を惜しむ思いに反応したわけであります。が同時に、彼女の血筋を引く孫の一人にその美がまさに受け継がれ生きていることを認めたことで、おばあちゃんは心からの慈愛に満たされたということにも・・。愛することの能力、そして別離に耐える能力は老齢において、死を迎えるとき、その最後の試練となるのです。しかしそれら能力も実のところ、赤ちゃんの最初の一年目頃の母親との関係性にその基盤があるわけです。と言いますのは、その頃には赤ちゃんはそろそろ‘一人の人 a whole person’として自らを意識できるようになりますし、自分が頼りきっていて、そして誰よりも愛しているところの人が、また同時に欲求不満を抱かせ、それで憎悪すらも喚起させる人であるといったことを悟るようになるわけであります。

そうしてわれわれは、羨望とか嫉妬心といった、どうしようもない性向をわれわれ自身のうちに自覚せざるを得ないことになるというわけであります。それが自らの内にコンティンされず、別の誰かへと投影される場合には、つまりのところもはやわれわれの心の中にその良き対象は所有されておらず、だからコントロールしようもありませんわけで、だからそのクオリティは減じられ、かつダメにされてしまいかねないということになりましょう。かくしてわれわれは初めて‘抑うつ態勢’と取り組むことをし始めるわけであります。己れがかくあるといったリアリティーに対して責任を引き受ける試み、それから他の人々との関わる上での真っ当な誠実さ integrity に、メラニー・クラインはそのように名付けたわけであります。心にそうした格闘を秘めながらも、われわれはその内なる羨望、恐怖そして罪障感と折り合いが付く範囲で、もしも身近に誰かしら心からの人生への愛を胸に、喪失やら老齢そして最後には死に直面している、そうした模範を目にする機会があるとしたら、大いに心励まされるに相違ないでしょう。

・新しく縁故関係 in-laws になること

新しく親戚となった者に対する態度は実にさまざまと思われます。新しいファミリーを認めるうえで、一方で疑惑そして嫌悪を抱くことありましようし、また他方‘理想化 idealization’に走るといった具合に、極端から極端であります。その後者の極端さについては、元の家族との縁を切りしたい、それとの関係を否認したいといった願望を伴っている場合があるかと思われます。

それぞれのファミリーが密接に伝統、そしてそれ自身の価値規範に結びついている場合ほど、そのファミリーのメンバーの結婚についてはその仔細が事々しく取り沙汰されるものであります。厳格に規定されている階級社会では、血族、その権勢および名誉心の維持・存続は個人の幸福よりもはるかに重大と考えられております。もし可能ならば、ファミリーは別のファミリーと相互的利益および双方の富の拡大のために縁組されることになるわけであります。個人が愛情と信頼からもう一人別の個人を選び、そんなふうには結ばれた二人が自由に自らの新しいファミリーを設けてゆくといった考えが受容れられるようになったのは西洋社会ですらも比較的遠い昔とは言えません。

しかしながら、社会が個人に容認し得る自由というのも相対的なものに過ぎません。新しく結婚した者はそれぞれ内側に過去の経験を引き摺っており、彼らが生い育つなかで他のファミリーのメンバーとの交流で築き上げられた‘彼ら自身の内なる家族 their own internal families’ というものを抱えもっているのです。つまりは、個々人が自己吟味するに十分なほどの、もしくは自らの落ち度やら不適切に対して責任を引き受けるほどの成熟度が備わっていない者は、得てして物事がうまくいかない場合には、その咎から逃れんとし、自分以外の誰かもしくは別の何かにそれを押し付けようとするものであります。そういうわけで、子どもたちの行動をめぐっての意見の不一致のある場合など、不心得は自分の方ではなく、もう一人の相手の方に、または親戚の誰某のせいにするということになりましょう。例えば、<あいつのああした振る舞いは、決して我が家系では見られることはない。あいつは、まるっきりお前のところのErnie おじさんそっくりじゃないか>といった具合に・・・。

自分のファミリーを理想化することは、その血族の人々を真実高く評価している場合には、忠儀心の産物でもあり、彼らのなかの良きものを保持し、家族の名誉が損なわれないうえにもしくは何らかの害によってその品位が穢されることから護るといった試みといえなくもありません。そうした‘分離主義 separatism’ 的なもの、すなわち自分たちに馴染みのある、伝統的で安心できる(良きものと同義語)を‘異なるもの’ から隔て、それを擁護するということが、例えば信仰の違う者同士の結婚を禁じるといった宗教的掟に覗われます。ユダヤ人やローマン・カソリック教徒の場合、そうしたことが実践されておりまして、それでもしも‘救済されている者たち the saved’ のファミリーへの新たな加入が許されるとしたら、その姻戚となる者はまずは宗教的教育を受け直さねばならず、その異端なる信条をさっぱりと洗い清めてから‘回心者 a convert’ となり、そこで初めて受容されるといったことのようにあります。

・誤った理想化について

しかし理想化が極端になりますと、信憑性に欠け、無批判となり、得てしてリアリティーを見失ったものになりがちであります。そもそも人間が善も悪も兼ね備えている以上、そうしたものが充実した中身を伴う、互いに付き合い甲斐のある関係性に基づいているとは言えませんでしょう。悪 evil というのは他のよその人々というわけで、異質なものに対抗するバリアーは殊に厳格となり、それはパラノイアに対する脆い防衛を形成するともいえます。つまりは‘迫害的幻想’ というわけであります。われわれの時代でそうした危険極まりないかつ悲劇的ともいえる例をあげますと、ナチのアーリア人種の理想化であり、それがユダヤ人によって‘汚染される’ と声高に喧伝されたことです。それにまた南アフリカの白人社会が有色人種を差別し、ことごとく排斥したといった実に恐るべきことがここで想起されます。

その一方で、理想化は新しく縁故関係を結んだ側にあるのかも知れません。元の自分のファミリーの何もかもがありきたりで息が詰まるということでしたら、結婚することで新たなファミリーの一員となることでそれらすべてから逃避できるということになるやも知れません。詰まりのところ、幼少期の‘檻(おり)’の中から抜け出す絶好のチャンスというわけでもあります。そこでかつて味わったありとあらゆる失望感、

決して身に付くことのなかった教訓の数々、未だ解決されていない葛藤、とりわけ両親との未解決なエディプス葛藤といったことがらのすべてを背後に置き去りにできるということでしょう。

結婚というものがお伽噺のハッピー・エンドみたいにくそれから二人はずうっと幸せに暮らしましたとさ・・>といったふうに新しい人生が約束されると思込んでいる場合、それ迄の家族内のありとあらゆる厄介なものそして拘束的な親的人物を葬ってしまいたい衝動に駆られ、それで双方のファミリーとの結びつきが断絶へと導かれることがあります。実家から遠く隔たった地へと引越すとか海外移住してしまうとかであります。それも独立したい、そして自己の人生を確立したいといった、止むに止まれぬ決意に促されてということはありません。しかしながら、もしもその動機なるものが両親に自由を制約されるからといった反抗のそれではなく、どちらかという、これといった価値あるものを何ら残してくれない親やファミリーに対しての‘恥’の感情ということであれば、新しい結婚はよりよい家庭、そしてもっと運のいい人生へのチャンスとして捉えられるでしょう。そこでは真の価値が認められ、そして報われるのです。ぼろを纏ったメイドがやがて王子さまと結婚し、王国を受け継ぐといったお話にも似て・・。

誰にしても初めて出会う親戚の者たちへの最初のアプローチは、大概のところ些か気の重いものであり、いづれか不確かさの混じり合うものであります。皆にいい印象を持ってもらい、そして将来結婚しても充分な稼ぎ手としてやってくれる旦那さんであるとか、あるいは家事全般の切り盛りがうまくできる立派なお嫁さんだとか思われたいといった期待感があるわけです。しかし実際のところそれ以上に、こうした現実的な気遣いにしても、より非合理的ともいえる源、つまりは以前の小さな男の子もしくは女の子が異性の親と結婚するという夢から起こる不安感と絡み合い、いっそう複雑なものになりがちかと思われれます。そういうわけで、花嫁さんが未来の義理の母親に初めてご挨拶するとき、花婿さんが未来の義理の父親に初めてご挨拶するときを考えますと、慣例的にいっても、それはとてもデリケートな事態といえるわけであります。

個々の親戚づきあいというならば、義理の母親 the mother-in-law というのはたぶん最も情緒的に複雑で厄介なものかと思われれます。それは、自らの母親とのプライマリーかつ最も重要ともいえる関係性のありとあらゆる未解決な葛藤を喚起するからであります。また義理の母親の観点からしても、たとえ彼女が結婚し子どもを産んだ人であっても、子どもであることを愉しむということを知らず、そして自分の子どもが大きくなってゆくその成長過程を愉しむことをも知らずにきた人であれば、こうした新たな関係性というのは殊更に脅かしを含んだものとなりかねません。彼女は自らの満たされない子ども時代の埋め合わせに自分の子どもには我が身を捧げるといったふうに‘ありったけのもの’を与え、それでたとえ夫との絆において相互性とか尊敬心が犠牲になっていたとしても顧みないということであれば、子どもの結婚に、そして我が子を奪ったとして義理の息子(もしくは娘)に対し脅かしを感じるということがあります。それから新しく結婚した娘というのが、例えば、母親のしがみつきをうまく切り離すことができないか、もしくは共感的な成熟さでもってそれに対処することが出来ない場合ですと、忠儀立て loyalty という点からして、親を選ぶか配偶者を選ぶか、気持ちの上で揺れを来たすことになりましょう。

夫との関係がかなりうまくいって、互いに充分愛し合っているという場合には、そうした周りをうろつく母親というのは厄介者でしかありません。しかしながらいざ夫と仲違いをしたときには母親のもとに戻るといった考えは、その臆病さからいえば‘安息所’であり、またその怒りからすれば‘武器’ということになります。夫にしてみても、彼自身と妻との間が不確かで些か考慮すべき問題を抱えている場合、そうした義理の母親というものは、いつでも割り込んできて娘の味方になって威張り散らすといったふうに、迫害的で批判的なアウトサイダーとして映ることになりましょう。

もしも夫側の母親に息子へのしがみつきがあり、実のところ内心秘密裏に夫ではなく息子と結婚している気であるといった場合ですと、義理の娘としてはその立場上脅かしを覚え、なかなか落ち着かないものかと考えられます。その彼女の役割において、最初は妻、そしてそれから特に子どもが産まれて母親になったときにですが、自分がなおざりにされているといったふうに関心させられることもありましよう。そうした事態はいかにもあからさまであったり、或いは微細で目立たないといったふうでもあり、どちらでもあるかと思われましよう。義理の母親は、新米ママの子育ての能力 *competence* を露骨に批判したり、もしくは孫とその年齢当時の我が子とを比較して揚げ足取りして厭味を言うことだてでありましよう。

その一方で、もしも義理の母親という人がその人生を大いに満たされて暮らしているといった場合ですと、我が子をそれぞれユニークでもあり、またこれから成長が楽しみな一人の人間としていとおしみ、尊重もするといったことをもわきまえ、息子もしくは娘が家から巣立ってゆくことの悲哀感を自らコンティンシ、気持ちが乱れたとしてもどうか平静さを保つことが出来るでしょう。そしてそのパートナーとなった人についても、我が子が真っ当に生きられるためには必要不可欠な存在として肯定的に評価することだてできましよう。新しいファミリー・メンバーとしてその人をありのままに受け入れることができ、つまりはよく言われるところの娘を失ったのではなく息子を得た(もしくは息子を失ったのではなく、娘を得た)といった古くからの言い慣わしがまさにその通り真実だったということを見出すことでありましよう。

・伯母(叔母)・伯父(叔父)たち、そして従兄弟・従姉妹たち

成人した兄弟・姉妹が密接な関係のままにいて、老いてゆく両親を気遣いながらも互いに接触を続けている場合、おばさん、おじさんそしていとこたちたちが次世代の者たちの人生にとって重要な役割を果たすことになりましよう。

もしも未婚のおばさんがいて、独身の境涯を惨めに思っているわけではなく、また結婚している姉妹に嫉妬しているわけではなければ、その母性的慈愛は甥やら姪やらを世話することにその捌け口を見出すことではしよ。もし彼女が若ければ、いつか自分も結婚をして子どもを育てるといった期待感を膨らませることも出来ましよう。ジーン・オースティン(訳註; イギリスの作家・1775-1817)は、‘お気に入りの姉妹’ かつ ‘お気に入りのおばさん’ として巷間によく知られた一つの模範ともいえましよう。彼女の著わした小説の中の主人公 アン・エリオット (訳註; 『説得』の女主人公) のように・・。われわれ現代社会で

は、婦人が生活の資を自ら稼ぐこととして自立することはそう難しくありませんが、19世紀頃ですと、未婚のおばさんというのは賃金をもらえない子どもたちの家庭教師程度の存在で、それも子どもたちが彼女を大して必要としなくなったときには何ら権限を有しない、その依存性は軽侮されかねないものであったろうと思われます。だが今やそうした彼女らの立場というのも、どちらかという未婚のおじさんがいるとして、その甥や姪に興味を持っていて、慣例的にプレゼント持参で訪ねてきてくれたり、時には驕ってくれたりもするといったそれにひけをとらないものになっていると言っていいでしょう。

勿論、おじさんそしておばさんがそれ以上のものであってもおかしくありません。子どもが両親との間に葛藤を抱え、諍いを起こしている場合、おばさんでも、もしくはおじさんでも、もし関心を持って耳を傾けてくれる気があるとしたら、安心して子どもはあれやこれやと愚痴を聞いてもらい、そして一緒に語り合い、そして纏れた糸を解くうえで何らかの助言を得ることだってあるでしょう。彼らは‘エディプス葛藤’の埒外の人だからであります。つまりそれこそが親子間におけるバトルの最大の火種 heat でもあるということになります。しかも彼らは、それら親子両陣営のどちらに対しても等しく銘々の幸福を気遣ってくれているわけですから・・・。

ここで私の知人でもある或るファミリーのお話を致しましょう。母親は5番目の子どもの出産後、健康を著しく損ねてしまいます。年長の子どもは6歳になるかならないかといったところでした。それ以来の15年間というもの、彼女は抑うつ的であったり身体的な病気を抱えたりで床に臥すといった時期が続き、従って家事全般を取り仕切るのは往々にしてもはや困難といった状態にありました。基本的には夫に支えられていたといえませんが、彼の方も長時間一日の大半を仕事で明け暮れしておりましたから、幼い子どもたちに十分な時間を割くということが出来なかったのです。その母親には一人未婚の妹というのがおりまして、隣町で仕事をしておりました。それで週末には必ずと言っていいほど訪ねてきてくれて、子どもたち銘々の成長に大きな関心を寄せておりました。そのうち子どもたちはこの叔母さんを‘二番目の母親’と見做すようになりました。そして何か良からぬことをしでかしたときも悩むごとを抱えているときもこっそりと彼女に打ち明けたのです。実際の母親は体力・気力の面でそうしたことは荷が重いといった感じでしたから、叔母さんの方がずうっと安心できたわけなのです。

そうした状況は極めて微妙ともいえましょう。下手すればこの叔母さんがこのファミリー間の愛情に不和を持ち込むといったこともあり得たかも知れません。もしも彼女が、いかにも勝ち誇り、自らの未婚の状況やら女性として性的魅力に乏しいといったことを、姉さんの子どもたちを奪うことで補うといったふうな気を起こしていたとしたら・・・。ところがこの二人の姉と妹の結びつきは、或る程度避けられない競争心やら嫉妬心があったとしても、愛情と尊敬のそれであったと言えます。それは彼女らの両親に対しての感謝の念を共有していたことに根差しておりました。叔母さんは子どもたち銘々が抱える問題の解決に手を貸してくれただけではありません。母親が健康の衰えゆえに子どもたちが最も必要としていたときに全然役に立ってくれなかったことを恨みに覚えるときなど、彼女は同情的かつ寛容的な態度で彼らを諭し、その気持ちをしっかりと支えたということでもあったのです。

その子どものうちの一人、男の子が青年期にあったとき、その叔母さんから聞かされたことがありました。たとえどんな悩み事を打ち明けられても、実際のところ自分が母親であったならば彼らをなんとか世の中に出ても恥ずかしくない人物にしなくてはといった責任感から厳しい態度に出たかもしれないけれども、叔母という立場だからずうっと対処するのは容易であった、と彼女は語ったということでもあります。彼女は仕事に就いていましたから自活力もあり、その点何ら不安はありませんでしたし、彼女の姉の状態にとても同情しておりました(と言いますのは、彼女は子ども時代にお姉さんによく面倒みてもらっていて、つまりは彼女にとってはお姉さんが‘二番目の母親’というわけだったからです)。姉さんが5人も小さな子どもを抱えて難儀しているのに知らぬ顔など出来ないと感じたわけでもあります。十分な人手もなし、雇うお金もなかったわけですから…。彼女には結婚のチャンスはあったらしいのです。彼女も一度はその気になりかけたんだそうです。でもその頃には、彼女は姪そして甥たちが、結婚を申し込んでくれた彼よりもいっそう愛すべき存在になっていることを悟ったのです。そうしますと彼と結婚するというのも彼にとってむしろ済まないことだと思ったわけです。彼女が付け加えて申ししたのは、それで独身を通した叔母さんに対して姪そして甥である彼らが罪責感を覚えることがあっては決してならないということでした。なぜならもしも彼女がほんとうにその友人に深く気持ちを寄せていたならば、当然ながら姪やら甥を何よりも優先することはせず、彼との結婚の方を選んでいたに違いないのですから…。

もう一つ、他の例をあげてみましょう。或る15歳になる女の子が、おじさんやらおばさんってどう思うって訊かれて、それに即座に答えますには、<一番いいことって、子どもがいるってことだわ…私、いとこたちが大好きなの…>ということでした。でも、大きくなってきた若い人たちのいるファミリーの誰彼にとって、いとこへの訪問が必ずしも純粋にありがたいものとも言い難いわけでもあります。それらは幾分か義務感を伴うということがありましょう。もっと年を経た子ども世代においては、兄弟・姉妹、さらには義理の兄弟・姉妹といった関係性が義務感という仮面の下に熾烈な競争心を潜ませているといってもいいでしょう。こうした緊張感はいとこ同士の間にも感染しないはずはありません。それは、折々に彼らが互いに接触するときに否応もなしに掻きたてられるわけですが、おそらくそうした競争心を募らせ、あからさまにそうした気持ちを正当化するということがあつたりするでしょう。

両親が自分の子どもを、学業成績が優良だの、容貌の良さだの、行儀の良さを引き合いに、家族内での兄弟・姉妹、そして他の親戚筋の誰彼とも比較して、ファミリーの誉れを競う‘ゲームの手先’にすることがあつたりいたします。それから子どもの方もまた、両親を同じように利用することもありましょう。自分の優位性を誇示するために、そしていとこの間で羨望を引き起こすためにも、親たちの社会的地位、その権限、そして趣味道楽を吹聴し自慢するといったことです。もしくは彼らの両親がさほど裕福ではない場合、もしくはおじさんやらおばさんと比べてさほど甘やかしてくれないといった場合には、侮蔑をあらわにするといったこともありましょう。

いとこ同士というのは、兄弟・姉妹のように分かち合わねばならぬことがたくさんある関係に比べれば、それほど密接でもなく窮屈ともいえませんでしょう。それでもある程度は、ファミリーという身内の安心感

やら恒久性をもっているという意味で、それはより広いフレームワークを提供しうるものであります。そこでは友だちになったり、喧嘩をしたり仲直りしたり、そして他と己れ自身との間の相互において、人間というものの熱情の気まぐれさ、裏切り、忠儀心、そして寛容といったものを学ぶことありましょう。こうしたいとこ同士の間柄に‘政治の萌芽’とでもいうべき何かを学ぶ機会があるわけなのです。自己の主張を通すために他とどのように同盟を結ぶか、どうしたら強者に自分が押し切られるのを防ぐことが出来るかといったことや、どのように己れの負けを受容し、或いはその收拾を付けるかといったことであります。自分が他の子どもたちにどのように見られているかを知る機会ともなりますから、己れ自身についての違った見方を学ぶ機会にもなりましょう。他者の行為の中に己れ自身を認めることもありますでしょうし、そのようにして己れ自身のアイデンティティについて、またその行く末についてもいっそうの現実感覚を把握することでもありましょう。

こうした機会というのは、それがたまたまであったとしても、子どもたちが一緒に群れる場合には幾らでもあるといえましょう。多くの友情の基盤となるのは、己れと同年齢の連れが欲しいということであり、己れ自身を見つけるといったニーズでありますし、誰か他者なるものとの出会いの中で己れ自身のパーソナリティの未知なる、そして予想も付かない側面を発見したいということでもあります。親の世代とは隔たった、子どもたち自身の共同体をもつといったニーズは、さまざまの群れの形成へと導かれます。その最も顕著なのは青年期においてであります。しかしいとこ同士というのは、ごく自然に同年齢の子ども同士によって形成されるものとは明らかに違います。そこには普通、興味・関心も違いますし、年齢によっても違うといったバリエーションがあるわけです。また子どもたちは生まれたときからそうした関係性の中にあつたわけです。我々は友だちを選ぶことができますが、親戚は選ぶことは出来ません。同じくわれわれは基本的なところでの‘自分らしさ’といったものは選べないわけです。それでも経験をとおしてそれが理解できてゆけるようになり、そして己れ自身が将来いかなるものとなるのか、それを自分がどう選択し、もしくは修正してゆくかといった見通しをものにしたいとわれわれは願うことでしょう。

自分のファミリーの外郭におじさん、おばさんそしていとこたちがいて、それらは共通の祖先によって繋がりがあっているわけですから(どんなに薄い血筋だとしても)、互いの接触は、たとえ大して頻繁ではないとしても、長い期間に亘って維持されてゆくことはありましょう。そして兄弟・姉妹と一緒に生い育ってゆく経験にいとこたちとの経験が付加されます。それは一緒に成長し、変化し、発展もしくは退廃したりもするといったふうにさまざまでありましょう。それぞれの個々がそうしたよりファミリーの広がりの中に自分の位置を認める限りにおいて、それぞれが他のメンバーそれぞれの運命に関与しているといったフィーリングを幾らかでも味わうことでしょう。そういうわけですから、もし何かしら不如意を抱えるメンバーがいるとしたら、そこには或る程度、より恵まれた誰かからの親切心が期待されるといったことが考えられましょう。

逼迫している哀れな親族とか‘厄介者(black sheep)’呼ばわりするのは伝統的に迫害であります。貧乏な親族は少なくとも、福祉国家が人々の生活が困窮しないように、また不平等にならないように

めざすところの政策の対象に該当するわけではありますが、しかし、個人的かつ集合的な責任というもの
の感覚の充分備わっているそれらファミリーのメンバーが、自らの不運がゆえに、もしくは何らかの過
失を犯したがゆえに零落した親族の状況をコンティンしてあげるなり、もしくはその状況緩和を図ってあ
げるとするならば、それこそが健全なコミュニティに必要な‘いしずえ’と申していいでしょう。

最近の教育的リサーチ及び組織的な調査は(例えば小学校を対象とした the Plowden report で
すが)、子どもの教育においてはファミリーが何よりも大きな後ろ盾となっているといった統計上の証拠
を提示しております。ファミリーという単位一両親と子ども一の中核となるのは、他のすべてがそれに依
拠するところの基盤であります。両親は、まず最初には母親であります、子どもに必要な安心と自
信が身に付けられるように援助いたします。そうであればこそ、子どもはいっそう経験を広げてゆこうと
しますし、異なった関係性の中で自らの異なった側面を表現できるような手段をさらに身に付けてゆくこ
ともなるわけであります。

両親の惜しみなく与える愛 generosity があればこそ、それが賢明でありかつそうすることが安全であ
るときに子どもたちが巣立ってゆくのを潔く容認もし、そして自分たちが提供することの出来ない経験を
彼らが他の人々との交わりから得てゆくことを促してやることも出来るといえましょう。

こうしてファミリーを振り返りますと、その人生は脈々と広がり連続性を有していることがお解りでし
ょう。兄弟・姉妹、いとこたち、祖父母、おじさんそしておばさんたちがいて、またそこには外から加わった
人たち、新しく縁故となった人達も溶け込んでいるでしょう。それこそが、銘々の責任感に基づいた‘共
同体精神 communality of spirit’を下支えする最良のものといえましょう。それはジョン・ダン(訳注;イ
ギリス詩人 1572-1631)の瞑想録の中の名句<人は誰しも孤島にあらざ(No man is an island
unto himself.)>をわれわれに想起させます。それはまた、われわれ自身のものであり人間という
ファミリー-the human family のものでもある歴史の或る部分をわれわれは生きていることを、そしてその
死ですらもそれとして快く甘受することを教えるのであります。<それゆえ敢へて問ふなかれ、誰がため
に鐘は鳴るやと。鐘は汝がために鳴るなり(Never ask for whom the bell tolls-it tolls
always for thee.)>の言葉どおりに・・・ (訳出;2015/07/15)

※原典;【New Society】, June15(pp.871-72),June 22(pp.916-17)
June29(pp.949-50),July6(pp.9-10).1967.

再録;【The Tavistock Model】 by Martha Harris and Esther Bick.
Edited by Meg Harris Willams. Karnac 2011. (pp.273-288).

【訳者あとがき】 ～ファミリー：‘私なるもの’の源流に遡って～

山上 千鶴子

このマーサ・ハリスの論文《ファミリーという因縁(えにし)》は、読みながら実に楽しかった。その文章に彼女独特の‘手触り’そして息吹が感じられた。「精神分析」の理論に精通している人たちにすれば、何やら一般向けの育児書’にも似た、ありふれた凡庸さをそこに見、物足りないかも知れない。＜なんだ、大したことなど言ってない。そんなこと、とうに知っている＞といった具合に・・・ふと思う。私たちはどうやら或る年齢に差し掛からないと、身近な親のことも同胞のことも見えてこないのではなからうか。おそらく親が老いてきたとき、親が他界したときこそ、癒されぬ内なる傷痕が、解けぬ纏れた因縁が再燃する。そして改めて自分にとって親たちが、そして兄弟(姉妹)がいかなるものであったのかと‘大人のわたし’が己れの心の内を覗きみる。そこで新たに彼らとの絆を‘生き直す’ことが始まる。それを私は‘成熟’と呼びたい。此の度この論文を翻訳する動機となったのは、マーガレット・ラステインの論文から‘プッシュ(後押し)’をもらった気がしたからで。私も以前読んだ折には翻訳したいというほどこの論文がさほど重要とも思えなかった。最後の辺りのファミリーというのが人間に究極に求められるところの‘共同体精神’の起点としてあるといった論点には深く感銘を覚えたが・・・でも、やはりそうだ。精神分析も今こそ‘ファミリー’に戻り、己れのうちにそれを辿り直す時期ではないか。フロイト以来優に一世紀を超えた現在、この原点回帰こそが精神分析の‘成熟’として期待されてはいないか。

「精神分析」とは妙なものだ。＜この指止まれ！＞で「精神分析」に寄り集う者というのは、どこか生きることに‘屈託’を内在させているような感が否めない。それを敢えて私は、その人固有の‘泣きどころ’と言っている。つまりはフロイトのいうところの‘コンプレックス’というわけだが・・・それはところが怯む・いじける・臆するといった「いのちの縮み」を意味している。ところが、いつしかそれが‘挺(てこ)’になることがあるのだ。深奥の間に沈み、あわや自滅かというところでグイと一蹴りして浮上する。投げ込まれた‘命綱’を手でしっかりと握り、光へと向かって・・・いのちが弾ける！「精神分析」というと、そんなイメージが湧く。すなわち己れが己れ自身を贖わんとするわけだが。どこからその‘命綱’がやってくるのか、はたしてそれは何であるのか、是が非でも尋ね当てねばならないというのが己れにとっての至上命令となる。かくして己れの‘泣きどころ’はいつしか己れを贖う‘ジャンピング・ボード’ともなろう。それがそもそも「精神分析」の眼目ではなかったか。そして、取り敢えずわれわれは己れの‘始原’へと向かう。＜わたしは誰であったのか？その始まりはどこにあったのか？どこでわたしは己れを見失ったのか？＞という密かな問いを懐の内に・・・

《源流を訪ねる旅》といったツアー企画に人気があるというのも考えてみると面白い。山奥深く分け入って、ようやく辿り着いたその先に「水源」なるものを見る。ただチョロチョロとした貧相な湧き水があるだけで・・・。実にあっけない、なーんだ！って感じなのだが・・・。だが人は妙な具合に納得して、再び日常身の雑事へと引き帰すのである。もはや後を振り返りもせずに・・・。それにも似て、自らのファミリーを思い返すということは、もうそんなことなどとうの昔に片付けたと思う人にしてみれば、概して取り沙汰

するまでもない、些細なこととも言えよう。思い出しても、直にまた記憶の帳(とばり)の向こうに仕舞いこんでおけるような具合で・・・。

このマーサ・ハリスの論文も見様によってはそうとも感じられるだろう。一般読者向けの新聞記事だったということだからちょっと悔りもしよう。精神分析を深遠な哲理でなければならぬと思ひ込む人たちにしてみれば、おそらくはナイーブ過ぎるようにも聞こえよう。全然難しいことなど書かれていないわけで、何げない言葉で実にわかり易い。だがそうした字句の数々が実にインパクトがある。もろに皮膚感覚に訴える。実に鋭くもあり、こまやかである。微小なるものへの感受性、そして洞察が圧倒的に行き届いている。読みながらも、時折胸が苦しくなることがあった。チクチクしたり、ジワジワと来たり、家族していた頃のあるとき、あそこで、こんなことあんなことといった映像の断片がチラチラと舞い降りてくる。それら思い出が押し寄せ、胸がいっぱいいっぱいになる。それで涙がふとこみあげてきたりもする。「家族すること」はかくも涙の込上げるものであったとは知らなかったという思いが正直した。今更ながらに・・・。例えば、私の幼少時、2歳半年下の妹に‘やきもち(嫉妬心)’を起こし、<なんでサッチャンばかり可愛がるの！>と母親を詰ったとき、<あなたよりずっと後から産まれてきたのだから、それだけお母さんと一緒にいるのが少ないわけで。だから可哀想なのよ>と言われ、私は<あっ、そうか。サッチャンは可哀想なんだ・・・>とピタッとねたみ・うらみが止んだことやら・・・。それに母親から、<あなたは小さい頃、お姉ちゃんにはほんとに世話になったのよ>と言われ、お蔭ですうと今尚も1歳半年上の姉に頭があげられないでいるといったことやら・・・。あれやこれや忘れていたことを久し振りにツラツラと・・・。

「精神分析とは何か」をごく素朴に言うなら、‘生きられなかったわたし’が‘生きられたわたし’によって抱えられる(贖われる)場なのである。だからこそ、‘私なるもの’の源流に遡ることが、すなわち己れの内なるファミリーという因縁(えにし)との出会い直しが必須となろう。そうであってこそ精神分析が‘地に足の着いたもの’になる。マーサ・ハリスのこうした‘草の根’的なスタンスをイノベーション innovation と称するとしたら、人は頭を傾げるだろうか。だが事実は、原点に返っただけの話。改めて思い出したい。「我がファミリー」のなかにこそ、まさに己れの屈託も、熱くなる心やら奮い立つ心も秘められている。躓きの石も勿論のこと、またそこに・・・。そしてそれを直視するならば、そこでは親から引き継がれた欠如、過誤、喪失、剥奪、欺瞞といった諸々、総じて‘無明’というべき何かを己れの中に再発見し、我が身を断罪することも避けられないであろう。ここで私は、イザヤ書の中の48:10の<わたしの苦しみの炉でお前を試みる>という言葉を出す。そうした挑戦に敢然と受けて立つ者、言い換えればそのような‘絆’を真に生きる拠りどころとした者であればこそ、人としての‘滋味’というか‘魅力’の醸しだされる印象がありはしないか。それを、この<Family Circle(ファミリーという因縁)>という論文をとおして、マーサ・ハリスのなかに見る思いがした。‘ひとの子’であった者がいつか‘ひとの親’になってゆくこと、そのいのちの列なりを深く見据えてきた人の透徹したまなざしがある。此の世の誰しもが、一人ひとり掛け替えがないということの意味が見えてくる。そして彼女の両腕(かいな)に抱かれていることを感じる。私は私ひとりのわたしではない、私は誰かのいのちを貰い受け、それを生きてもいるのだということも素直に頷ける。そして、もしも<私はこんなふうに‘救われた’・・・>という自覚があれば、その人は幸せ

であろう。その‘救いの手’が身近な家族の誰かであったとしたら尚更に・・・。

この論文が殊更に面白いのは、そこに書き綴られている幾つかの例証が、匿名ながらも、マーサ・ハリス自らの体験であるということだ。それは、彼女の娘のMeg Harris WilliamがかつてWEBサイト【The Harris Meltzer Trust homepage.mht】に掲載していた《Martha Harris: a biography》(2011)に照合すると分かるのだが・・・。取り分けて、Aunt Cathy(キャシー叔母さん)のことである。実母は4人目の子どもを出産後に健康を著しく損ねて、抑うつ状態となり、殆ど床に臥す日々であったらしい。それでキャシー叔母さんが姉の幼い子どもたちの養育に手を貸すようになっていった経緯が知られる。病弱な母親そして幼い弟妹たち、なるほど、ここにマーサ・ハリスの‘泣きどころ’があったのだ。そして彼女というのちの‘源流’に遡れば、キャシー叔母さんの手のぬくもりがある。それは確かだ。独身ながらも自立した職業婦人だったキャシー叔母さんは(訳註; タイピストであったらしい)、姉夫婦の子どもたちに骨身を惜しまずに献身した。あたたかな眼差し、その慈しみの手・・・。そしてマーサ・ハリスの持ち前の不羈独立の精神はキャシー叔母さん譲りでもあったろう。そして、はたと閃いたのだ。そうだ確かに・・・！実はつい最近、YouTubeでビオンのタヴィストック・セミナーの動画を見た(※)。その折にマーサ・ハリスが司会役でビオンを紹介するスピーチをなさったのを懐かしく拝見した。そのウィットに富んだ語りもだが、それ以上に、その眼差しの輝き、そしてその手の動きが生き活きとして、華やいだ‘いのち’に満たされていることに注目した。嬉しかった！それこそがあの当時、【タヴィストック】に居た‘幼い雛’ともいえる私たちが彼女から享受してきたものだ。私たちに差しのべられていた、あの眼差しと手のぬくもりの感触とは実は‘彼女のなかのキャシー叔母さん’だったのかと今更ながらに悟った。ここでは‘内的対象 inner objects’というのが抽象的観念では毛頭ない。誰かの裡に生きている実在として、まさに今尚もその人は生きているということが実感された。なんとマーサ・ハリスのその身体の部位(眼そして手!)に、そしてそのいのちの発露のなかに、キャシー叔母さんが厳存している！私はその映像に目を凝らしながら、その発見に狂喜した。知らなかった。でもそれを知れば、尚更に嬉しいではないか。死者は死者ではもはやないのだから・・・。そしてここに慰めがありはしないか。ふと私は傍らにマーガレット・ラスティンを感じていた。マーサ・ハリスを喪った1986年以降の癒されない彼女の深く愁い悲しむ心に寄り添うように、しばし私はしみじみと喪に服する思いに浸っていた。マーサ・ハリスがその裡に生きていればこそそのマーガレット・ラスティンであったろうし。そして私もまた・・・。そこにジョン・ダン(John Donne)の瞑想録の一節にある詩句<誰がために鐘は鳴る>が頭の中をリフレインしていた。死者も生者もなく、唯いのちの列なりがある。もはや名付けようもない数多のいのちたちに助けられていることに感謝し、尚も私の内で生きて繋がってゆくのちたちを守りかつ継がねばならぬと思いついた。それがいつしか自己を超える、マーサ・ハリスの言うところの《communality of spirit(魂のコミュニティ)》になればいい。そのように夢見ようではないか。

【※註; Wilfred Bion Seminar - 3July 1978

<https://www.youtube.com/watch?v=oDab093cPPc> 】

さてここで、ついでに《我らがビオン(W.R.Bion 1897-1979)》についても語っておこう。あの何ともややこしい御仁の屈託というか‘泣きどころ’が何であるのか。そこから精神分析への道に辿り着いたのは彼にどういう必然があったからなのか。そもそもの端緒は、やはりファミリーに遡らねばならないだろう。

W.R.ビオンが亡くなって後、妻のフランシスが編纂して《自伝》なるものを出版した。その著書【The Long Week-end 1897-1919】の中に一箇所深く心打つ文章を見つけた(P.23-24)。かつてのブリッテ・イッシュ・ラーズ(統治)の時代、英領インドに公僕として赴任していた父親、そしてそれに連れ添う母親を幼いウィルフレッドがどのように眺めていたのか。それは、生き難い生を受けながら生き延びんとあがく者たち、その胸に巣食う‘無明’をやがて精神分析家として彼が我が身に引き受けていった一つの契機でありはしなかったか。試みにその箇所を翻訳してみた。

或る日のこと、家族が皆揃い、讃美歌を歌っていた。<Sometimes a light surprises the Christian when he prays (時としてクリスチャンが祈りを捧げているとき、光が驚かす)>であった。母親が『讃美歌集』を傍らに置きながら、父親に話し掛けた。<わたしは、そうした経験をしたことがあるなんて誰からも聞いた覚えがないんだけど。フレッド、あなたはどうか？>と訊いた。彼女は悲しそうだった。父親はしばらく黙考していたが、やがて幾分落ち着かなげに、<そうだねえ、そういうこともあるということだね。だが、わしの場合はそうしたことなど無かったなあ・・・>と答えた。私は彼らを眺めていた。そして熱心に耳を傾けていた。彼らはなんであんなふうに悲しそうなのだろう？私は思わず手を母親の手に触れ、彼女を慰めようとした。彼らは私がそこに居たことをすっかり忘れていたようだ。一瞬はとして迷夢から覚めたみたいに母親は私の髪の毛を撫でた。それから話題はもはや元へ戻ることはなかった。なんだかすごく奇妙ではないか。私はそれから、しばしばあれは一体どういうことだったんだろうかと訝ることがあった。<ねえ、お母さん。どうしてそんなに悲しそうなの？>と、私は後で彼女に訊いた。彼女は、それをてんでまともに受け取らなかった。で、私はしつこく訊いた。<ほらね、‘光が驚かす a light surprises’ ってことだよ>と、彼女にいつぞやの会話を思い出させようとした。それに対して彼女は <そうねえ、いつかおまえが大人になったら、そのことを理解するでしょうよ>と言った。私は尚もしつこく、<だけどお母さんは大人でしょ。それなのに理解してるって言ってないじゃないのさ・・・>と言い返した。彼女は微かに顔を赤らめ、声を出して笑う。なんともぎこちない笑いである。…………私はどうやら自分もその‘光が驚かす’といったことにはこれ以上首を突っ込まないほうが良さそうだなと思う。…………

ビオンが講演などで、特にタヴィトック・セミナーでは特にそうであったようだが、どうも‘挑発的’といった印象が拭えないわけだが。彼という人物の‘泣きどころ’(つまりはコンプレックス)をしっかりと押さえると、是が非でも‘挑発的’でなければならない彼の心情がよく分かる。それが何かといえば、親の世代から受け継いだ大英帝国の「植民地支配」の‘負の遺産’ではないかと私は薄々感じている。その栄光を

荷うとは、国民一人ひとりがまた‘植民地化されてゆく’ことでもあったろう。とどのつまりが窮屈で自然であるということをまるで知らない人間にさせられる。本音を漏らすことなど実はしたくないということで。これこそが英国民(the British)の‘DNA’とはいえないか。ピオンは生涯、そうした不自由で窮屈(confined)な思いに苦しめられてきた。外側の檻(おり)、そして内側の軛(くびき)、それらの両方において・・・どれほどそれを呪ったろう。所詮‘困われ者’でしかないという窒息しそうな思いに抗いながら、ゴジャゴジャと誰にも解らぬことがらを喋り散らかすだけだとしても、とにもかくにも己れの‘不愉快’から辛うじて逃げられるとしたら、それしかない。「精神分析」とはそうした意味で彼にとっての唯一の突破口だったろう。彼の生涯とは、恨めしくも片付かない己れ自身を敵にしている‘シャドー・ボクシング’に終始したように覗かれる。そして‘恰好悪い’自分をも敢えて人前に晒すことで誰彼を煽っている。おまえさんもどうだい・・・と！ごく最近のこと、『ピオン全集』が出版されたと聞く。そしてこれから先あと50年も100年もそれは人々に読み継がれてゆく。そして個々人の中の‘植民地化された部分’の解放が目指されてゆく。幼い彼の心に刻まれた‘光が驚かす a light surprises’という言葉、それは‘神の恩寵’と言い換えてもいいだろうし、つまり無明の反対、光明 enlightenment であるわけだが、そこへ辿るには逆説的ながら大いに己れの内なる‘不愉快’に身を潜ませるしかない。慢性的倦怠感(アンニュイ)から目を背けず、‘建て前’を止めろということ、そして殻を破り、やがては‘自然’へと立ち還ることなのだ。

ここに一つ、愉快なことがある。同じ著書【The Long Week-end 1897-1919】の中にピオンそして家族の写真が掲載されてある。その一枚[1903 with his sister]が大いに問題である。彼は6歳ごろであろう。どこか写真館で記念に撮ってもらったようだ。パリッとした服装で、上着は勿論靴下も革靴も立派なものだ。ところが一緒に写っている妹がなんと裸足なのである！その写真を目にしたときにはギョツとした。実にみつともない disgraceful！日常的に暑いインドでは子どもたちは裸足の生活に慣れていたのである。だが、カルチャーが違う。きちんとした中流家庭ならば靴を履かないなど許される筈がないのだ。どんな躰け方をされたものやら、まるっきり「御里が知れる」ではないかと、私など驚きを越えて内心ちよびり軽侮を禁じ得ない。だがしばらくして、ふと可笑しくなった。お人形を片手に眉をひそめてブスツとした顔をしているこの女の子がなにやら愉快地感じられた。おそらくおとなしく言うことを聞かず、大暴れした後なのではないか。親も根負けしたろう。それで裸足のままでの撮影となったというわけ。どんな子どもだったのかと興味は津々として尽きない。ウィルフレッドは8歳で英国の学校へやられた。だからこの妹との付き合いはそれほど深いわけもなからう。確か彼は妹とは折り合いは良くなかったと語っていたはず。さもありません！それも彼独特の諧謔であり、この‘じゃじゃ馬さん’が彼の妹ならば、彼は生涯その‘妹の力’に底上げされていたとはいえないか。生来の愚図愚図した、窮屈(confined)で内向的な彼にこの妹が人間としての面白味を添えたのではないかと私は内心勘ぐっている。勿論のこと、彼はてこずったろう。お兄ちゃんのやること為すことに張り合う、この利かん気の強い女の子は一筋縄では行かない。だが自由気儘(not confined)でむしろ面白かろう。自然体といってもいい、断然弾けているではないか！それが兄の中で‘火花 spark’となっていたということはないか。彼の中にマーサ・ハリスとは別の意味で、ファミリーの、それも実妹が彼の欠損 default を補い、その人生に彩りを添えていた

と私は想像する。同胞とは反撥し合い、それでいて同一化もし、ごく自然にお互い同士のそれぞれの人生にそれぞれが織り込まれてゆくものだ。そうした結ばれこそが生きることの妙ともいえよう。

ここで彼のメラニー・クラインとの因縁を考えてみるとさらに面白い。どうやらこの‘裸足の女の子’は彼女に‘転移’されていた節が大いにある。ピオンは飼い猫にメラニーという名前を付けて、折々にこっそりと揶揄することがあったらしい。どうやらメラニー・クラインとの間柄もスツタモンダで、どちらかというところ、そして絶対勝てない相手ということでも厄介な代物であったようだ。大いにてこずったということ。それはかつての妹が彼にとってそうであったのにも似て・・。概してよく躰された教養ある英国紳士たちは、「鉄の女」とかつて呼ばれた元首相マーガレット・サッチャーのような女性には滅法弱い！頭があがらない。メラニー・クラインという方も実際のところ、酒も煙草も大いにやるといったふうでなかなか堂々たる女丈夫であったみたいだから、内心厄介な代物といった苦手意識は最後まで払拭されなかったとしても、そのお蔭でピオンの中で燻っていたものに火が付いたともいえよう。

さらにもう一つ。愉快的発見があった。つい最近【岩崎学術出版社】から翻訳出版された『ワーク・ディスカッション』（編：マーガレット・ラスティン、ジョナサン・ブラッドリ 監訳：鈴木誠、鶴飼奈津子）であるが、これは実に面白かった。【タヴィストック】での「ワーク・ディスカッション・セミナー」の総濼いということになるが、一読して感銘を覚えたのは、そこに集う者たち誰しもがピオンの‘コンテインメント’を旗印に掲げていることだ！それが世界中各地を席捲しているかの如く、多様な職域を超えて、医療・教育・福祉、それになんと司法の鉄柵をも飛び越え、さまざまに臨床の現場で対人援助の輪の拡がりをつくってゆく。その果敢さに唸った！私がかつて彼の地に居た折によく耳にした「Professional detachment（プロとして対象と距離を保つこと）」といった概念は後方へ退いた感じがした。明らかに臨床的スタンスに変革が起きている。もはや型通りでしゃちこぼった、窮屈で恰好付けただけの専門職ではない。そこに‘手’が感じられた。‘血’が通っている。ここで、ふと一つの幻影が脳裏を掠めた。ピオンの利かん気の強い妹・‘裸足の女の子’が縦横無尽に闊歩している？！もしそうだとしたら、われわれはピオンに感謝しながらも、実は彼の中の‘裸足の女の子’に感謝しなくてはなるまい！そして、われわれもまた、したたかにしぶとく彼らと‘共闘’を続けてゆこうではないか。（記：2015/07/15）

※参考文献；

- ・Bion.R.W. (1982), The Long Week-end.1897-1919. Karnac Books.London.
 - ・Hindle.D. & Sherwin-White.S. edited: (2014) Sibling Matters. Karnac Books.London.
 - ・Rustin.M. & Bradley.J. edited; (2008) Work Discussion.-Learning from Reflective Practice in work with Children and Families. Karnac Books.London.
- (邦訳；【ワーク・ディスカッション 心理療法の届かぬ過酷な現場で生き残る方法とその実践】
監訳：鈴木誠、鶴飼奈津子 岩崎学術出版社 2015)
